今月の聖句

「互いに重荷を担いなさい。」

ガラテヤの信徒への手紙　６：２

二年前にもこの聖句を選んでいたんですね。それぞれ別の人格だから、担う荷物の重量感が違ったり、荷物の中身が違っていて難しいから、一緒に抱えてくれる人との巡り逢いをお祈りするのがよいでしょう、と。悲しみの共鳴がキズを共に包み合い、共に痛み合えますようにって求めることは私達にも可能なのだ、と締めくくりました。今は少し違うコトを思っています。アレ書いたときには、「重荷を担う」のにその相手とのよい交わり、或いは穏やかな関係を前提にしていたなぁと気付いています。≪仲よくなくっちゃダメですか？≫……仲がいいかどうかなんて、表面的にしかわからない場合が結構多いです。そして、コレを言い始めたらキリがありませんが、［仲がいい］ってどーゆー関係？気が合う――イヤイヤ。いい加減過ぎて使えないな――。「互いに」「担う」のが二者の間で起こると考えたのが私の間違いです。大体二千年前、名にし負う聖パウロ（セント・ポール）がガラテヤ地方の幾つかの教会に宛ててしたためた書簡です。教会グループですから三人以上は当たり前。それで、一つのグループが全員［仲よし］だなんて。いくら昔でもソレはない。教会内でみんな違って大変なのは洋の東西を問わない筈で。何か行き違いがあっても許し合えたり、〈あの人も苦労してるから…〉と思い遣れる相手ばかりではないに決まっています。だからモンダイが発生しても関わらないよう離れて行くか？と言えばソコはそーでもないときがあるから不思議です。教会が雨漏りする、お客さんをおもてなしするのにお料理が足りないかもしれない、連絡の取れない信徒さんがいる、そんな不安を前にすると、ナゼだか修繕にかかる費用が集められ、料理が持ち寄られ、誰かが自宅を訪れて安否を確認する。或る困り事を自分達に関するモノとして考え、自分に出来る方法を考える。ソレもまた「互いに」「担」っているのだと思うんです。一緒にソレをスル人が、自分にとって［仲よし］かどうかは無関係に、信仰生活を守るという目的が同じだから、自動的に発生するか、〈アノヒトに同調するハメになるけどマァ、い～か〉と協力している。そんな担い方があってもいい。［仲よし］さんを必ずしも助けられないように、逆に眉をヒソメたくなる［アノヒト］と協力していたり、手助け出来る場合もある。神様は別に礼拝堂にお住いになっているワケではありません。私達一人ずつと常に在ってくださるのです。けれどヒトが心を鎮め神様と向き合える大切な集まりが礼拝であり、そういう人が集まるのも教会の機能です。神様のお望みが実現されるよう、御意志である聖霊がひゅるんと堂内やホールに、心に、吹き付けられるのでしょう。仲ワルイけど守りたいモノは同じ、ナゾの共同体、ソレが教会です。

チャプレン　司祭　セシリア塚本祐子